

令和 8 年 第 7 回
富 山 県 教 育 委 員 会 会 議 録

I 開会及び閉会の日時

令和8年6月26日（金）

開会午前10時00分、閉会午前10時44分

II 場所

県庁4階大会議室

III 出席委員

1 番 大西 ゆかり

2 番 松岡 理

3 番 坪池 宏

4 番 黒田 卓

5 番 牧田 和樹

教育長 廣島 伸一

IV 説明出席者

教育次長

矢野 康彦

教育次長・教育みらい室長

田中 宏育

教育次長

初田 正樹

参事・教育企画課長

森安 祐成

教育参事・教育みらい室小中学校課長

木下 貴子

教育参事・教育みらい室県立高校課長

宮池 秀洋

教育参事・教育みらい室特別支援教育課長

魚津 直美

参事・教育みらい室県立高校改革推進課長

丸田 祐一

生涯学習・文化財課長

中川 武志

教職員課長

水上 優

保健体育課長

前川 秋人

教育企画課課長（ICT 教育推進担当）

五十嵐 佳美

教育みらい室課長（高校教育充実強化担当）

武末 宏和

教育みらい室課長（特命担当）

江上 有紀

教育みらい室課長（児童生徒支援担当）

金場 安史

教育みらい室課長（夜間中学設置準備担当）

岩田 理恵子

生涯学習・文化財課課長（青少年・家庭成人教育担当）

小川 理香

保健体育課課長（食育安全担当）

川田 康弘

V 傍聴人数 1 人

VI 会議の要旨

午前10時00分、教育長が開会を宣する。

1 会議録の承認について

令和8年5月27日開催の令和8年第6回富山県教育委員会会議録

会議録閲覧

廣島教育長から可否を諮ったところ、全員異議なく承認した。

2 報告事項

(1) 臨時代理について（令和8年6月富山県議会定例会に付議する事案に対する意見に関する件）

教育企画課長から説明した。

(2) 令和8年度中学校第3学年及び義務教育学校第9学年生徒及び令和8年度県立高等学校全日制課程第3学年生徒の進路希望調査結果について

教育みらい室県立高校改革推進課長から説明した。

(3) 令和9年度富山県公立学校教員採用選考検査志願状況について

教職員課長から説明した。

3 今後の教育委員会等の日程について

教育企画課主幹から説明した。

4 議決事項

午前10時39分、地方教育行政の組織及び運営に関する法律第14条第7項ただし書の規定に基づき、議案第21号および議案第22号については、委員全員の同意により会議を非公開とすることを可決し、議事の審議に入った。

議案第21号 令和9年度使用義務教育諸学校用教科用図書の採択に係る諮問事項の件

教育みらい室小中学校課長から説明し、原案のとおり可決した。

議案第22号 富山県いじめ防止対策推進委員会委員任命の件

教育みらい室課長（児童生徒支援担当）から説明し、原案のとおり可決した。

なお、非公開で審議した議案第21号および議案第22号については、適切な時期に公表することを決定した。

5 議事

○報告事項(2)(3)関係

〔黒田委員〕

・中学生の進学先別希望状況について、卒業予定者数は100人くらい減っているのに対し、県内の県立高校への進学希望が270人くらい減っている。私立の無償化や、広域通信制課程等の選択肢が増えてきているのもあると思うが、県内の県立高校、特に全日制課程でかなりの減少が見える。今ちょうど高校の再編について議論しているが、このあたりも踏まえてやっていく必要があると思った。

〔教育長〕

・何か内訳はあるのか。

〔教育みらい室県立高校改革推進課長〕

・今ほどの8ページの第2表について、全体7,240人とは全日制課程への進学希望であり、県内の県立高校への志願が6,210人、ここに記載はしていないが県内の私立高校は852人、また県外については国公立と私立あわせて178人である。県内の私立高校や県外への進学希望が割合として増えていることで、県内県立高校が減少している。

〔教育長〕

・今の部分について、前年度の数字はあるのか。

〔教育みらい室県立高校改革推進課長〕

・今口頭で申し上げた県内私立高校は、昨年度は5月1日現在の進路希望は704人、今年度は852人で、約150人近く増えている。県外については、昨年度は153人であった。これが今年度は178人で、25人ほど増えている。

〔牧田委員〕

- ・今の黒田委員の発言にも被るが、この中学生の進路希望は、トレンドが3つあると思っている。
- ・1つ目は、まさに黒田委員がおっしゃった私立との兼ね合いというか、今までは県立高校に進学していた子どもたちが私立を視野に入れてきている。150 人くらい増えているということだが、高校再編の新時代ハイスクールについて、私立を視野に入れながらどのように教育内容を設定していくかが大事になると思う。
- ・2つ目に、学科別に見ると、やはり普通科や総合学科の人气が上がってきていると読み取れる。
- ・あわせて3つ目のトレンドになるが、商業科について、非常に言いづらいが、商業科と言われて何を学ぶかが明確に定義できない時代に入ってきているということだろう。昔はそろばん検定や簿記検定等がいろいろあって、そういったスキルが社会から求められていたが、今は全部会計ソフトがやってしまう。商業科というくくりで教えていたものが既にトレンドとしてなくなってきているのではないかと思う。今は普通科や総合学科にどんどんシフトしてきているし、高校卒業後の子どもたちの進学先を見ても、4年制の大学を希望する人が増えているようだ。そのあたりもあわせて、今度の新時代ハイスクールは少し考えなければいけないと思った。
- ・教員採用選考検査について、志願倍率がほぼ2倍ということで、2人に1人が合格することになる。今回300名程度募集ということだが、非常に悩ましいのは、教員採用選考検査というのは絶対評価ではなく相対評価であり、志願者の中で最低点が決まっているわけではなく、割合で決まる仕組みだろう。そうすると、毎年最低基準が上下するわけで、県立高校の入試の場合も同じことが起きる。定員を満たすために例年より低い点数の子どもを合格させると、トップとの差が大きく開くので、授業等の進度に影響が出る。そのようなことがこの採用選考検査でも行われるのかどうか。つまり、昨年度までだったら採用できないが、今年度は人数が足りないから採用しようということが起こるのか。であれば、そういったことに対してどのようにカバーするのが大事だと思っている。多分これからは、採用後、教員免許を持ってすぐに学校現場に行くのではなく、どこか民間企業でいう研修所みたいなところで、1年くらい研修を行って現場に送り出すような取組みが求められるのではないかと考えている。そのところはぜひ頭に入れてほしい。

〔教育長〕

- ・新規採用の皆さんは学校現場での負担も大きいということで、その方々をサポートする教員の方を別途つけていただいて、OJT 的なところはあるが、学校での業務、人間関係の持ち方等を以前よりは手厚くサポートさせていただいているのかと現状思っている。牧田委員がおっしゃったように、教員だけではなく、どこの世界も今はそのような状況になっているのだろう。県庁の知事部局でも似たような面があるにしても、やはり子どもに接する教員という部分に対し、その特殊性をどう自覚し、育ててもらおうかということは考えていかなければと思う。

〔松岡委員〕

- ・教員採用選考検査について結構ニュースにもなっていると思うが、富山県の場合倍率が低いということで報道されたり耳に入ったりすることが多い。都会だから必ずしも倍率が高いというわけでもなさそうで、田舎でも高いところは高いようだが、なぜ富山県が全国的に低いと考えられるのか。そうであれば、どんな手が打てると考えられているのか、教えていただきたい。

〔教育長〕

- ・私の感覚で言うと、志願者数の年度別推移が11ページの一番下にあり、減ってきているということは昨今の民間の採用と反比例するようなところもあるのだろう。そうした中で、教員は免許職なので、いわゆる教育学部以外で積極的に教員になろうとして免許を取ってこられる方が減ってきていることが全国的にあるのだろうと言われている。あわせて、倍率の関係なので、分母と分子の関係があるが、採用数とは基本的には退職される方を埋めていくイメージで、今は大量退職時代が続いている。これが今の表の採用予定者数では、大体300前後の数字が並んでいるが、教員約8,000人に対して300

人なので、約30年間で9,000人以上の計算になり、率が高い。もうしばらくするとこちらのほうが下がってきて、300という数字ではなくなってくるのかと思うが、母数が一緒となれば必然的に倍率は上がるというようなところもある。そう言いながらも、やはり志願者数をキープするか、または逆に増やすことができるかについては国全体の話でもあり、また富山県としては富山大学の教育学部のほうとの連携というようなこともあると思うが、そういった後継者を育成・確保していくという取り組みも必要になるだろう。

〔坪池委員〕

- ・中学生の進路希望について、そのうち県立高校に行きたいというような質問の仕方なのか、それとも積極的に私立高校に行きたいと考えて調査しているものなのか。そうだとすると、県立高校希望者は、まだ気持ちは決まっていないが全日制の高校と書いているのではないか。もし積極的に私立高校に行きたいと言っているなら、それは私立高校に行きたいというよりは、私立高校のどこに行きたいかが決まっているのではないかと思う。そうだとすると、高校の情報はオープンハイスクールで子どもたちに伝えることになるが、中学生に来てもらって説明することになるので、最初から私立高校のどこかにいきたい人たちには、県立高校の情報がいかないことになると思う。県立高校の魅力化と中学生の間のミスマッチが当然あるのだろうと思うが、その次の段階で、中学生に寄り添った魅力化をしたとして、どのように現状中学生に届いているのか。多分それは市町村教育委員会によってばらばらだろうし、中学校によっても違うのかも知れないが、そのあたりを調査する等、県立高校の情報がきちんとすべての中学生に行き届くような工夫が必要ではないかと思う。

〔教育長〕

- ・先ほどの数字は専願かどうか分かるのか。

〔教育みらい室県立高校改革推進課長〕

- ・各県内中学校から、私どもの指定の書式によって数字としては報告いただいているが、各中学校でどういう形で進路希望を個々の生徒から聞いているかは、こちらでは把握できていない。

〔牧田委員〕

- ・それではバイアスがかかってしまうのではないか。どこかで揃えたほうが良いのでは。

〔教育長〕

- ・言い方が正しいかは分からないが、今までは普通はまず県立高校を希望し、一部の方を除いてはそれと私立高校を希望するというものであったのが前提の調査だったのだろうと思う。それを今の時代、変わってきているかもしれないものをどう調査するのかは若干追いつけていないところはあると思うが、それは別としても、実際この数字がこうなっていることは先ほどから言っているトレンドがあるのは一緒だろう。あわせて対中学校との関係で、高校の魅力化の周知について、県立高校課から何かあるか。

〔教育みらい室県立高校課長〕

- ・中学生に訴えかけることについては、オープンハイスクールがやはり主になってくると思う。その他は、県の東部では結構、高校が中学校に呼ばれることがある。例えば、私は以前は富山商業高校にいたが、商業で学ぶのはどういうことなのかを説明してくださいということで、宣伝に行ったりしていた。西部の中学校ではあまりそういうことがない聞いたこともあるが、始めているらしいということを目にしたことはある。西部の学校でも、普通科も県下一円化となつたし、情報を届けたいという思いは高校にもある。中学校から声をかけていただければ喜んで説明に行くので、ぜひそういう機会を設けていただければということは、学校現場にいたときに感じていた。

〔教育長〕

- ・小中学校課からはどうか。

〔教育みらい室小中学校課長〕

- ・学校によって、生徒の希望が多い高校に来ていただくということもあれば、交通の利便性等も考えて、子どもたちがオープンハイスクールに参加する等、いろいろなやり方があると思う。高校から中学校に来ていただけるということであれば、また情報提供をしていく必要があるのかと思う。

〔牧田委員〕

- ・今の話を伺っていて、多分2つの段階があると思った。まずは中学生が高校を理解できていないという問題で、今の説明のように、高校から説明に行ったりオープンハイスクールをやることが有効だ。ただ、中学生がそんなことは分かっていて、この学校に行くんだという問題は別である。高校再編に結びつけて考えると、定員割れを起こす学校は何が原因なのか。認知されていないからなのか、認知されているにも関わらず定員割れなのかの原因は全然違うと思う。せっかくどこに進学するかという調査をするのなら、先ほどの教育長の話では少し遅れているとあったが、そこに手を突っ込んで、理由まで分かるようにやったほうが良いというか、今まさにそういうデータが一番必要なのではないか。それが地域特性なのか、偏差値なのか、教育内容なのか、それすら今は分からないということを考えてほしいと思う。

〔教育長〕

- ・いずれにせよ高校からの中学生への訴求ということで、あの年代の子どもたちからすれば、1～2つ上の先輩たちが来てくれていろいろ話を聞けるというのは一番影響を受けやすいのかと個人的に思わなくもないが、中学校側で受け入れることが可能なのか、県立高校側から出すことが可能なのか、そういったこと等ができるのか考えていきたい。

〔大西委員〕

- ・中学生の進路希望について第2表が話題になっていたが、私は子どもたちが、私立高校の教育費が無償化となったことで、その学校が私立か県立かを気にしなくて良くなったからかなと思った。私の子どもの中学校には、いくつかの最寄りの高校が説明に来られて、その場で子どもたちと一緒に聞くことができた。実際子どもが選ぶ決め手になったのはオープンハイスクールで、学校に足を運んでその学校の雰囲気を見ることが決め手になったと思っている。
- ・教員採用選考検査については、志願者の数について努力されているのは分かるが、数が増えるところまでいかないというのは毎年の報告で感じている。教育学部の学生さんたちも全員受けられるわけではなくて、他の企業に就職される選択肢もあろうかと思うが、まずは教育を志して教育学部に行かれたのではないかと思いますので、その学生さんたちが受けてもらえるようになったら良いと思う。その中でも富山県を選んでほしいときに、PR 動画等を作られたのも良いと以前触れたと思うが、富山はどこが違うのか、どこが富山の魅力なのかというときには、こんな取組みを始めたとか、こんな取組みが先生の働き方改革に繋がっているとか、働くことの魅力が大きいということが伝わるように、実際に何かそういうものがあるのか、あるが伝えきれていないのかということも考えていただきたい。

〔教育長〕

- ・各学校が今まではどうだったのか、それで良いという意見もあるのだろうと思うが、いろいろ考えなければならぬところがあると感じている。

〔大西委員〕

- ・富山県独自でできることはあるものなのか。先生は教えることが仕事なので、教えること以外のことで、いろいろとスクールサポートスタッフやスクールソーシャルワーカーの方の配置等もやっていたいているが、それでもやはり教えること以外の業務が多いと聞く。そういうところをさらに考えてあげたり、やはり福利厚生の部分、働きやすさ、働き続けやすさが大事なことだと思うので、そういった実績があれば学生さんたちも来やすく、働き続けられるという安心もあるので、ぜひそういうところもお願いしたいと思う。

午前10時44分、議事が終了したので教育長が閉会を宣した。